

なんと鋭く、人生と学問の真実のありように迫った深い問いかけの箴言であろうか。

これは実は、東大教授服部四郎との間にかわされた論戦をふまえているのである。亀井孝が「朝日ジャーナル」誌の依頼を受けて、服部教授の論文集『言語学の方法』を紹介した折、服部が「最善の音韻論的解釈は一つしかない」という作業仮説を提示したことに対して、亀井が評論し、『国語学』一九五八年三月初出、論文集1所収)、同じ三月には、別に「意味のはなし」と題して『言語研究』に長編の論考を発表したことに端を発した。

「服部さんは、わたくしのことを樹を見て林をみないかのようにおっしゃるが、これは、下世話にいう『目くそはなくそをわらう』のたぐいであろうか」

(「意味のはなし」『言語研究』論文集1所収)

と切り返している。

「木を見て森を見ず」と安易に言いつのる人こそ森どころか「かつて一本の木をも」見ていたことがあったのかと。とにかく亀井孝の筆鋒は、すべて曖昧なもの、前後本末転倒のもの、頑迷牢固なもの、常識に姪しているもの、虚飾誇大のものを切って捨てるのである。

戦後半世紀の国語学界の歯に衣させぬ論客であり、露伴いうところの超俗の風流人であり、学問真実以外の何者をも恐れなかった「畸人」亀井孝の学風と人生を、私のささやかに管見するところから語ってみることにしよう。

目次

序文	1
第一部 その学風	9
1 昭和の三畸人	10
2 圏外の精神	12
3 橋本進吉	23
4 東京帝大の国語学	32
5 亜流の学問	40
6 師弟	44

7	キリシタン研究	50
8	イグノラ	57
9	出会い	60
10	腐儒	65
11	柁 源一	73
12	文章指導	76
13	文章タペストリ	82
14	軍服姿の鷗外	85
15	講義光景	92
16	飄々の風狂	96
17	舌禍と筆禍	102
18	仮名書き「かめいたかし」の由来	105

19	礼節	107
----	----	-----

第二部 その研究

20	絢爛としたキザ	110
21	まことに驚き入ったる悪文	116
22	国語学よ、死して生れよ	124
23	バカのもの	130
24	がんおけ	132
25	「アブランのふところ」の話	135
26	学問を生きる	140
27	榎 一雄	143
28	『コンテンツスムンヂ』研究会	145
29	古活字本『伊曾保物語』	148

人名索引	273
亀井孝略年表	269
50 瑞泉寺	265
49 イグナチオ教会	260
48 集中治療室	252
47 死に支度	245
46 深夜の電話	241
45 最後の晚餐	238
44 スネイクウッドの杖	236
43 人間同士	231
42 母よ母よ	228
41 おふくろは三重の産	226

40 アリゾナ行き	221
39 厳父のこと	218
38 北軽井沢族	216
37 慶応幼稚舎	212
第三部 その生活	211
36 「楽屋裏のはなし」の話	205
35 似てい過ぎるよ	195
34 あたらぬも八卦	186
33 学問に執する	176
32 森田 武	166
31 学者に三通り	165
30 「天皇制の言語学的考察」について	154

2 圏外の精神

亀井孝論文集1『日本語学のために』（一九七一年六月）が出たとき、筑波大学教授・小松英雄が「国語学」88集（七二年三月）に書評を書いた。

それは、一種のラブレターかと思ったほどに、熱烈な亀井讃歌であった。と同時に、亀井孝に師事してまだ日の浅かった私にとって、その存在がただならぬものであることを教えられた衝撃の書評でもあった。

書評は、「圏外の精神——フーゴ・シュハート」という論文を中心に据えて述べられてあった。この論文は、法政大学における日本言語学会主催の講演の原稿である。

当日の講演を聴講した小松は、

「はなしがフーゴ・シュハートの著書「ブレヴィーア」所収の諸論文をつらぬく個人主義へとすすんでゆくにつれて、この講演が、ただ、ひとりの優れた言語学者についての紹介だけを目的としたものでないということがわかってきた。なぜなら、シュハートを主語として語られることどもが、講演者亀井自身の、研究者としてのあり方をそのまま物語っているように思われたからである。……この講演をきいて、わたくしの胸にわき起こった疑問は、なぜ、亀井孝氏が、自己の

学問の内側について、今、はっきりと語る気になったのかということであった。」

小松は、亀井の内面的な動機が、この論文集に収録された論文配列をみて、「日本語学——亀井孝——圏外の精神、そこにはこの言語学者の半生の歩みとそのひとつの決着とがあることに気づいた」と、書いている。そして、このシリーズが「論文集」と名付けられていることについて、著者あとがきから次のような文章を引用する。

いったい私は、ひとつの偏見をもっている。それは、学問の労作が体系のよそおいをととのえた成書の形をとることを否定はしないけれども、真の学問研究の生命は、モノグラフを自己目的とする論文にあるということである。

論文集として集められた諸編がそれぞれ独立した論文でありながら全体がそれなりのまとまりをもっているのは、亀井氏が言語ないし言語学に対して、どのような態度でのぞんできたかということと密接に関連しているからだと述べ、序文（河野六郎・亀井氏の友人）の言葉から、次のような美しい文章を引用する。

亀井君はシュハートに名を藉りてそこに自らを語っている。彼の言葉を借りて言うならば、「かれはその豊かな知恵の珠玉を、ひとり心おもむくままに、あたりへばらまいたひととして、これを一口に言えば、非体系的なところこそ、その身上なのである。かれの活動をそのすみずみまで